港町巡礼

北川冬樹

一、仕事での巡りあい

日暮れが早い師走の夕暮れ頃、夕刊が入る音で目が覚めて起きる、そして風呂に入り夕方五時に朝食を摂る。この男、海村八郎は満五十才で昼夜反対のこんな毎日になって二年になる。仕事は神戸市兵庫区切戸町にある明雅タクシーの夜勤タクシー運転手である。阪神大震災、リストラを経験し最近なんとか生活が落ち着いてきた。兵庫大仏や清盛塚があり兵庫の歴史を感じるあたりにある車庫に夜の六時頃出勤する。タクシー会社は朝が早いので夕方には事務所は閉ざされ、宿直のオヤジさんが運転日報をくれる。朝の出勤者なら免許証提示とか挨拶言葉の唱和とか訓示があるが夜勤は簡単だ、白いシャツに青いネクタイをぶらさげていれば合格である。両替機で百円玉と十円玉をひとにぎり分両替してつり銭を作る。日報のメーター指数を確認して車の調子を見ると車庫には十分もいない。

今夜も少しでも多く水揚げする為に運転手は長年の勘や予備知識でお客様に出会える場所へ向かう。駅のタクシー乗り場に並ぶ者、道路の角に停車させる者、流す者と様々である。曜日、天候、行事なども大切な要素になる。

海村は今この仕事が楽しくてしかたない。前職をリストラ退職した後、これまでの人間関係を捨てたい思いが強くなり、パソコンのアドレスや携帯番号を変え、非情だが飲み会の誘いも一切返事しなく、今、この仕事を楽しんでいる。

十二月は不景気な中にもお客様があり楽だった。やがて今年一年が良かった人にも良くなかった人にも平成十八年の大晦日がやってきた。サービス業や交通機関で働く者は正月も当然出勤である。明雅タクシーの場合は元日と二日は公休とし自主性に任せるが大晦日は平常通りである。七時の紅白歌合戦が始まる頃車庫を出る。湊川神社では夜店が並び初詣客を待つだけである。しかし今年は深夜になっても晴れ着姿の人や注連縄をつけた車が少ないと感じる。大晦日のこの日はお客様が多く探さなくとも楽に出会えた。須磨までのお客様を降ろした帰り、国道二号線を走っていると東尻池交差点で二人手を上げている。しかし遠くから見ると西洋画にあるマリーアントワネットのようにかなり膨らんだ服装をしている。なんかおかしな人間だなぁと思い近寄って停まると派手な美しいチマチョゴリの上に黒いコートを着ている。停車させてドアを開ける。

「どちらまで」

「まっすぐいけ　走れ　走れ」

かなり酔っている、心の中で海村は、トラブル客かと思った。真っ直ぐ行けというお客様には行き先を聞かず真っ直ぐ走ることにしている。それは聞いても言ってくれないのが殆どだからである。車を少し走らせもう一度

「まだ真っ直ぐでしょうか」と聞き返す。

「ここどこや」
「湊町あたりですが」
「アイゴ、福原、福原行け　走れ　走れ」
　後ろでは理解できない速い韓国語で会話している。明るく酔っているだけで運転手を困らせようとしていないことだけは解り安心する。車は福原桜筋に入りその先の柳筋の交番の近くでお客様は降りる。降ろしたあと走り出し五分くらい経った頃、運転席の後ろで携帯電話が鳴る。その瞬間、しまった　また携帯の忘れものだと思う。先ほどとは違う低く威圧感のある声で
「もしもし、これ、私の電話、持ってきてください　さっき降りた前のスナック　ケンチャナヨよ」
　忘れ物は運転手の不注意であるから届けますと返事した。
「ところで貴方の名前とタクシー会社は」
　酔っているにしてはしっかりしている。早く届けて次の仕事をしようと思い言われた店のドアを開けるとさきほどのお客様が中から出てきて
「ありがとう　入りなさい」
「いや　仕事なのでここで失礼します」
「何いうか　コーヒー入れるから　ねっ　わざわざ届けてくれたのに　入りなさい」
　優しさと命令口調の混じったヘンな日本語である。海村の後ろに周って背中を押し店の中に入れる。酔客に交じりカウンターの一番隅に座らされコーヒーを頂くハメになる。時刻はすでに元旦の午前二時、こんな時刻に営業している店も不思議だがさらに不思議なのはほぼ満員に近い客が入っていることである。
　ママはうりざね顔で瞳は丸くに髪をうしろで束ねている。背筋が伸び姿勢が良いのでチマチョゴリがとてもよく似合う。美しい。そしてママが披露していた日本の歌「珍道物語」を聞いてその情感豊かな歌い方に海村はなにか忘れていたものを思い出したような気がした。そう、それは海村の大好きな韓国である。今夜はお金を払って遊びに来ているのではないのでコーヒーを頂くとすぐに席を発つ。
「ご馳走様でした　失礼します」
「わたし、ここのマーマの千華です」
と薄い草色の名刺をくれた。海村にとってこのコーヒーをご馳走になったことはお客様の気持ちでありチップを頂くのと同じように受けとめていた。
「あなたタクシーの名刺頂戴よ、今度乗るとき呼びたいから」
　海村は他の運転手と同じく一応タクシー運転手の名刺を持っていたが余程のことがないと最近は渡さない。それは固定客より流しの方が気が楽だからである。運転手になっても顧客という人間関係ができるのがイヤなのである。
　しかしなぜかこの時名刺を差し出した。この差し出した一枚の名刺が海村の人生観をさらに変えることになるとはこの時は予測もしなかった……
　こうして大晦日の夜勤を終え給油し車庫に戻る。メーター指数を日報に書き込み本日の水

揚げ額を計算した時点で自分の稼ぎがわかる。
納金袋に現金やチケットを入れ大きな金庫に落とす。そしてこのあと運転手には洗車という作業が残っている。灰皿洗い、マット洗い、窓拭き、車体拭き等晴天の日でも最低三十分はかかる。洗車を終え午前六時過ぎに兵庫区石井町の自宅に帰宅する。脱いだズボンを洗濯機に入れる。毎日ズボンをよく洗わないと立小便の跳ね返りで裾が汚れ車の暖房で匂ってくるからである。海村には妻の弓子と短大生の浩美、高校生の慶太郎がいるが現在は妻子の住む隣の部屋で暮らしている。生活時間帯が違うことやこれまでの経緯の結果そうなってしまったのである。
元日だけ休み正月二日は出勤する、競合するタクシーが少なくこの日もお客様は見つけやすかった。南京町の中華街で食事をする人、ホテルを利用する人、初詣など正月らしかった。街を流し走っていると未登録の番号で携帯が鳴る。
「もしもし、この前はありがとうマーマの千華です。あと三十分くらいで来れるか？　お客さんあるよ」
「こちらこそこの前はご馳走様でした」
とは答えたもののそのあと返事に詰まった。それは海村にとってスナック帰りのお客様は苦手なのである。どんな紳士でも酒が入ると性格が変わることがあり、特に機嫌の悪い時とんでもない体験を今まで数多くしてきた為である。そしてこの不景気の折、空車のタクシーなど電話でよばなくてもすぐにみつかる。特別な人間関係があるとかサービスをしない限り運転手と顧客の関係は続かなく呼んでくれることについ何故だろうかと考えてしまう。
「いま、どーこですか？」
「栄町あたりですから十分ほどの所です」
「まっているよ」
躊躇したが「お迎えにあがります」と返事してしまった。
お客様は七十歳いやそれ以上の高齢の方で車に乗っても窓を開けママの手を握り離さない。
「発車してもよろしいですか？」
「ああ、鈴蘭台へいってくれ」
「お父さん明日も来てね」
とママが見送る。ルームミラーには深く礼をした千華ママが写っている。この礼の姿は今まで知っているどこのママよりも丁寧であった。車は平野交差点を通過し有馬街道に入り暗闇の冷えた坂道を登っていく。神戸市街は南北の巾が狭く山間部を越えた奥に住宅地が広がっている。
「運転手さん正月やのに乗っているのやなぁ」
「はい、貧乏暇なしです」
「いや、働くのはええことや、千華ママなんて元旦の夜以外店を開けている」
「がんばる方なんですね」
「目標があるのやろなぁ」

まもなく老人の自宅に到着する。古いが立派な邸宅である。老人を降ろしたあと海村はママに電話し
「お客様を無事おとどけしました、ありがとうございました」と報告する。
「ごくろうさま、ところで海村さんはいつ休みよ」
「はぁ　ときたま」
「お酒は飲みに行かないの？」
「今はそんな身分じゃなくなりました」
「今度店にいらっしゃいよ、安くするから」
海村はスナック遊びが好きであったが今は行く回数がかなり減った。ある程度続けて出勤すると休みたくなり次の休みの日に飲みにいく。ママの誘いを思い出し「ケンチャナヨ」のドアをそっと開ける。
「あっ　来てくれたの　アナタ　そこ座りなさい」
いらっしゃいませ、どうぞお掛けください……と言わない商売らしくないこの変な日本語だが悪く感じないのが千華ママの人間味かもしれない。ママ以外に二人の女性がいる。カウンターが低い分椅子も低く背の低い海村には座りやすかった。周囲の客を見て自分が一番若いのかもしれないと思った。この前乗ってもらった老人もいる。適当に水割りを飲みながらチヂミを食べる。その間も絶えず誰かが歌っている。年齢層もあってか演歌が多い。海村も適当に何曲か歌う。数名の客が帰り客は海村ともう一人の男だけになった。その男は元山といい「愛の迷路（サランヘミロ）」「七甲山（チルガプサン）」を韓国語で歌っていた。哀愁があり上手である。
「海村さんも韓国の歌何か知っている？　釜山港へ帰れとか大田ブルースとか」
海村はどうしょうかと迷ったが「何もなければ（ヘフ）」を韓国語で歌った。
「アナタ矢張り私の思った人だった、このウタ画面見ないで唱うなんて　アイゴー」
「いや、ちょっと記憶にあるだけや」
「ちょっとの記憶でこれだけ歌えるか！アホ。アナタが私の携帯を届けにきてコーヒーを飲んでいる時、画面の韓国の歌を見ている眼が懐かしそうだった、これからはここの店に来なさい」
海村の趣味は水槽で魚を飼う事と韓国である。韓国が趣味という表現はおかしいが哀愁の韓国演歌に魅力を感じる。海村はそろそろ帰ろうと思い支払いを済ませ表に出る。ママが見送りに出て
「アナタ今日から私のチング、わかりますか」
しかし営業文句と思い、さようならを言い残し振り返らずに福原を後にする。
そしてこの後出会う鬼ヤンマの平井を含め、なにか最初から決まっていたような展開の一年が動き出す。

二、鬼ヤンマとの出会い

どこのタクシー会社でもそのすぐ近くに喫茶店がある。明雅タクシーの近くに「コルトン」という喫茶店がある。運転手の制服で三宮の喫茶店に入るのはなぜか気がひけるがここは何の遠慮もない。ドアを開けると運転手ばかりである。そし椅子の間隔にもゆとりがありくつろげる。それぞれがつり銭袋を横に置き雑誌を見たり雑談をする。

「砂田のおっさん、最近水揚げはどうや」

「不景気やから棺桶に片方の足突っ込んでいるのも同じや、飢え死にするかもしれへんで」

「おっさんは給料の前借ばっかりやもんなぁ」

「海村も二年くらいになるからもう慣れたやろ」

「いや、厳しいお客様に泣き優しいお客様に泣いています」

すると一人の運転手が面白いことを言い出した。

「あのなぁ、後ろの客席に十円玉一個置いといてみぃ」

「えっ？」

「運転手さん十円忘れているという人と、黙って握る人がいるで、お客さんの本性がわかるで」

人の心を試すようであるがこの運転手も接客で苦労してきたのだと感じた。

休憩のあと営業に向かう。零時頃湊川公園で客待ち中に車から降り知合いの運転手達と話をする。

「正月過ぎると暇やなぁ」

話している横で信号待ちしているタクシーがいた。

「おい、この車メーター入れるのを忘れているで」

「違うで、浜風タクシーの鬼ヤンマの安のおっさんや」

「何や、鬼ヤンマいうて」

「トンボの親分やないか、鬼ヤンマのおっさんは一日に三千円はトンボするからなぁ」

鬼ヤンマのおっさんはこちらに気づき堂々と笑顔で手を振って行った。

※トンボとはメーターを入れずに客から料金をもらい着服すること。昔はエントツともいった。

「しかしそんなこと出来るのか？　周囲の目とか密告とかあるやろ、また客にはどう説明するのや」

「海村、お前はまだ半人前の運転手やなぁ、運転手はメシ代とタバコ銭くらいはトンボせなあかんで、仕事の日は自分の金使わんと過ごすのが運転手や」

背任横領であり尊敬できる人物ではないと軽蔑の気持ちをもった。ところが運転手仲間の説明ではそうでもない。

「鬼ヤンマのおっさんは阪神大震災で嫁と子供を無くし自分の店もつぶれたんや、おまけに潰れた自宅のローンは残っているらしいんや」

「その面はお気の毒やけどトンボとは関係ないしなぁ」

話をしていると時のたつのが早く自分の番になった。行き先は夢野町でワンメーターであった。

次の日曜日にみんなで教会に行こうと千華ママから誘われた。海村はキリスト教徒ではないが参加する。新開地のビルの中にある小さなプロテスタント教会だった。神戸には有名な教会がいくつかあるがそれらとは程遠い造りである。周囲を見渡すと水商売の人が多い。千華ママは素顔も美しい。そこに鬼ヤンマのおっさんがいるではないか。薄汚れたシャツに作業ズボンという服装である。しかし鬼ヤンマは真剣にお祈りしている。

「ママ、あの人と僕と同じ仕事や」

「ああ、平井安雄さんね、自分を捨て他人に奉仕するのが生きがいなの、今時珍しいわよ」

礼拝のあとママのおごりでファミレスへお茶を飲みにいくことになる。この時ママと一緒に礼拝に来ていたユリさんを歩きながら紹介される。

「私の友達のユリさんです、海村さんとは仲良くなれると思うょ」

海村はユリの艶やかさになぜか恥ずかしく下向いて挨拶した。

ファミレスでは平井を紹介してくれた。

「この人海村さん、アナタと同じ仕事よ」

「海村です、よろしく、あのー福原、湊川公園でこの前みかけたんですが」

「ああ、わしなぁ殆どあの辺りにいる、通称鬼ヤンマの安といわれている、海村さんはタクシー長いんか？」

「いえまだ新米です、この前トンボしているの見ましたよー」

「わしなぁ今五十五歳や。地震で家族も財産もなくしたんや、もう立ち直ることがないのがわしの運命や、そやからこの福原、新開地のひとにかわいがられて生きるだけなんや、トンボは不正行為やけど交通費の出ないホステスを安く乗せるのも共存共栄やで、水揚げは十分会社に納めているしな」

「平井さんはね福原、新開地では人気あるよ、客待ち中には道路のゴミを掃除するしお客さんにスナックやソープの案内もするから店からもかわいがられるし」

初めて見たときは悪人に見えたがその笑顔と隠さない話に人間味を感じた。

「地震の被害はお気の毒に思います、がんばって下さい、僕は人間嫌いでこの仕事しています」

「ああ、まだ少しは将来のあるあんたは真面目な運転手したらええ、また見かけたら声かけてな、わしは鼠小僧みたいなもんや」

日曜の昼頃解散する。仕事で酒を飲み自分を忘れたように見えるときがある彼女たちが教会に来るのは何故だろうかと考えるのであった。

数日後福原で鬼ヤンマが客待ちをしているので後ろに停車させ雑談する。

「こんばんは、福原好きですね」

「ああ、ここで仕事していたら気楽やし悲しくない」

「仕事で悲しくなるの？」

「他人の幸せみるのがつらいんや、百貨店の前なんかで待っていたら幸せそうな家族が買い物帰りに乗ってくる、それがつらいんや」

「なんとなくわかります」

「わしなぁ、夜勤で毎晩乗っている、夜の福原が似合っているんや」
「僕も夜勤です」
客が来たのでその日は別れた。しかしなぜか話の続きを聞きたかったので翌日も後ろに停車させる。話によると鬼ヤンマは長年タクシー会社の仮眠室で暮らしているという。阪神大震災以来気力をなくし部屋を借り自活する気もなくその日暮らしをしている。朝は喫茶店のモーニング、昼と夜はコンビニの弁当や食堂で済ます。風呂は会社の風呂に入り時たま銭湯に行く為の洗面器とタオルをトランクに乗せている。衣類は必要最低限で数少なく所持品はセカンドバッグのみだそうだ。
「アパートを借りる気にもならへんし浜風タクシーの社長とは神戸の地元経営者の仲間として昔対等に飲む関係やったから仮眠室暮らしを大目にみてくれているしなぁ」
「ご家族や商売をなくされた失意よくわかります」
「わしなぁ千華ママが韓国で商売はじめたら使ってもらおうと思っているのんや」
「えーっ、そんな予定があるの」
「わしなぁ神戸が嫌いなんや、思い出が多すぎてつらいんや、全てを忘れたいし思い出を捨てたい、それにこのままやといずれ社長に迷惑かけるからな、別人になりたいんや、ほんまは自殺したらええねんけどやはり死ぬのは怖い」
「平井さん、まあお互いがんばりましょう」
海村にはそういうしか言葉がなかった。
梅雨の雨が飲み客を遠ざける。深夜の中山手は蛍火のようなタクシーのアンドンの灯であふれている。
「あかん、福原か病院へ行こう」
と中山手を離れ柳筋の南のコンビニ前に並ぶ。ここもいつのまにかタクシー乗り場になってしまった。午前一時過ぎスナックやソープ勤めの帰りにこのコンビニで買い物を済ませ乗ってくれる。そこへ鬼ヤンマから電話が入った。
「海村、どないや、暇やろ」
「あかん、全く人影がないです」
「今から小野市の北へ客乗せて行かないか？」
「えっ、僕にお客さんを紹介してくれるのですか？」
「ユリさんからの紹介客で海村指名や」
「ほんなら喜んで行かせてもらいます」
「一時半になぁ、ソープのメリークラウンの裏口で待っていてや、お客さんの名前は若菜さんや」
「はい、わかりました」
「それでなぁ、海村君がよかったら今後は若菜さんを自分の客にしていいで、若菜さんにもそう言ってあるから」
今までもソープの女性と思われるお客様は何度も乗せたが推測だけで店に迎えに行くのは初めてである。ネオンが消え薄暗いソープの裏口で表示を「予約車」にして待つ。定刻ど

おり女性が出てきた。その姿はジーパンにTシャツで化粧はしてない。
「海村ですが、若菜様ですか？」
「はい、お願いします」
「小野市のどの辺りでしょうか」
「山麓バイパスの白川で降りてね、三木街道から小野バイパスに出てね、あとは言うから」
「はい、わかりました」
海村は余計な会話は反っていけないと思いユリさんとの関係も知りたかったがしばらく無言であった。車が葬蓮道から有料道路に入る頃
「あら、何にもお喋りしないのねぇ、お話好きと聞いていたけど」
「はい、紹介していただいた大切なお客様なので余計なお話は失礼かとおもいまして」
「そんな気遣わなくても、私とユリさんは大の仲良しよ、今まで鬼ヤンマさんに送ってもらっていたけどあの人もお客さんが多いので海村さんさえ良かったらこれからお願いするわ」
「ありがとうございます」
「週に二回帰るからね。はい、これ一万円渡しておくね。メーターここで切ってもいいのよ」
「はぁ僕それができない性格なんで」
「やはりユリさんが友達と心に決めた人ね、クソ真面目はダメよ」
「僕がユリさんの友達？」
「あら、この前の礼拝以来ユリさん海村さんのファンみたいよ」
車は街灯や対向車もない田舎道を走り若菜さんは家の前に着いた。
「ありがとう、次は三日後ね、名刺頂戴、あとでユリさんに電話してあげてね」
「こちらこそありがとうございました」
若菜さんは農家風の大きな家に入っていった。
電柱を見ると北条町と書いてある。この不景気な時に一万円の水揚げは助かる。
ユリさんに電話してみる。
「あのー海村ですが……若菜さん今送らせてもらいました。ありがとう」
「そりゃ良かった、彼女には彼がいるからお客様以上のことは考えたらダメよ！！」
そして鬼ヤンマにも御礼の電話をする。
「ありがとう、今送りました」
「お前やったらメーター回したんやろなぁ」
「はい、回しました」
「また今度お茶でも飲もなぁ」
深夜の知らない田舎道を迷いながら福原に戻る。
翌日御礼の意味も兼ねて新開地のファミレスへ鬼ヤンマを夜食に誘う。
「昨夜はありがとう」
「なんでメーター回すんや、途中で切ったらええのに、もったいない」
「ええっ、そんな不正行為でけへん」
「わしなぁ、昔、持ち金が千円程しかない日がきたんや……」

鬼ヤンマの話によると、
鬼ヤンマは運転手をはじめた頃日報を正確に書き不正行為などしなかったそうだ。ところが体調不良や乗り逃げなど悪い事が数日続いた。さらに風邪引きで三日ほど休みそしてとうとう千円ほどしかない日がきた。賃金翌日払いの日雇いなので今一万円いや五千円あったら営業に出られるし明日からなんとかなる。しかし千円程では不安がある。その時はお金の大切さが身にしみた。地震で死んだ家族のことを想うと一晩食べられないことはがまんするつもりで千円札を百円に替えあとは十円を少ししか持っていない。もし五千円札でお釣りのお客がきたらどうしよう、とか考えながら最初は買い物帰りの女性を乗せなんとか千円札を手にする。ワンメーターのお釣りを出し百円が七個となった。ジュースを買えば減るのでその千円札を大開通りにあるタクシースタンドの両替機で両替する。ところが次はひよどり台までのお客にあたる。運賃とも二千円くらである。一万円札がきたら困るので「お客様お支払いはもしかして万札とか五千円札でしょうか」と聞いてみる。客は「あっ千円札一枚しかないわ、料金所で替えたらええやん」という。料金所がきても客はお金を出さない。「あの、お客さんのお金でつりをもらいたいのですが」「なんや千円札がないのと違ってあんたお金持ってないのか、どこのタクシーやつり銭もないのに乗せるのは……」いい年をして恥ずかしくまたみじめであった。千円札が二枚になり福原に停める。お腹がすき喉も渇くが自分のお金はタバコを買ったので八百円しかない。こんなときに限りまた続くのである。若い女性が乗ってきた。
「小野市まで」
本来ならうれしい長距離である。
「うれしいけどお釣り千円札二枚しか持ってないので万札やったら先に両替してもいいですか」
「どないしたん、競馬で負けたん？」
鬼ヤンマは生活苦であることを道中恥ずかしがらずに話した。
「ふーん、私も地震で主人が下半身不随になり家は壊れ今実家から福原へ通っている、これ一万円払うから好きなところでメーター切りや」
鬼ヤンマは不正行為ではあるが五千円でメーターを切り五千円を着服する。
「ありがとう、悪いことやけどこれで明日につなげる、ほんまにありがとう」
「運転手さん、そこのコンビニで停まって」
客はお茶と弁当を買ってきた。
「何にも食べてないのやろ、はい！　おにぎり、走りながら一緒に食べよう」
鬼ヤンマは涙を流しながら食べる。社長にも借金を言えないしまた親戚はないものと心に決めている。五千円をもらい明日につなげた嬉しさと感謝の涙である。
「運転手さんのしていることは悪いことやあらへん、生きることが先や、私も風俗で働くしかないのや、誰も助けてくれへん。今度も呼ぶから電話おしえて」
「ほんまにありがとう」
この話で

「この女の人が海村さんに紹介した若菜さんや」
「ええーっ　優しいんやなぁ」
こうして鬼ヤンマの話を聞いていると底辺で生きる者の叫びが伝わってくる。

三、老人の遺志

鬼ヤンマとも仲良く仕事をしていた八月の十四日頃
「もしもし、私ママ、すぐ店来れるか？」
「十分はかかるけど」
「早く来い」
出来る限り飛ばしていくとチマチョゴリではなく落ち着いた色のスーツ姿のママが待っていた。なぜかユリや元山もいる。
「ナーダクのコウセイ病院わかるか？　そこ行って」
「ああ、港が一望できる景色のええ病院や」
走行中何も話さずに潤んだ目をしている。到着しママが降りると
「車停めてアナタも来なさい」
「なんでや」
さらに聞き返しても無駄なのでついて行く。
三階の南向きの個室を開けると鈴蘭台の老人が寝ていた。最近顔を見ないと思うと入院していたらしい。家族や看護師さんもいる。映画の臨終のシーンのようである。老人は
「おお、よく来てくれたな、息を吹き返し、残念ながらあと三日くらいは持つと思う」と冗談ともとれないことを言う。
「びっくりしたよ、もう、元気出して」
「いや、八十過ぎているからいつかは……なっ、この景色のいい個室で死ぬんや」
急に気分が悪くなって自分で救急車を呼びかかりつけのこの病院に来たそうである。中年過ぎの息子と嫁らしき人がいる。千華ママは
「挨拶遅れたよ、いつも店来てくれるママです」
あい変らずヘンな日本語である。すると息子は海村に挨拶する。
「海村八郎さんですよね、父からはお話は伺っています」
「そうですが、どうして僕の八郎という名前を」
「私、東大阪大学の一年後輩で春の校友会定期総会でアジア探訪の本の披露でお顔覚えています、そうですよね」
「そうやけど本は趣味の範囲やし、わがままな出来の悪い先輩で申し訳ない」
「大阪の船場と新大阪で父が起こした繊維卸しの商売を継いでいます、社長というのは大袈裟で毎日肌着に囲まれパンツやステテコを扱うのに追われ何の楽しみもない毎日です」
偶然でもない、二十万人もいる校友に出会う事は多い。話すか話さないかだけでタクシー

の客としても何人も乗せているだろう。
「やっぱりこの海村やったか」
「この」とは枕もとには海村の本がある。
「読んでくれたのですか、ありがとうございます」
「ああ、棺桶にも入れてもらってあの世への土産にする、みんなありがとうまだ数日はもつから今夜は帰ってくれ、海村君、人は欲より温かく楽しく生きることや」
生死を達観した老人である。一安心して戻ることにする。
店の前で皆を降ろし流し営業に向かう。死を目前にした老人を見て無謀に追い越していく若者の車に命の大切さを警鐘したく思った。当たり前のことだが誰にも老人のような日が来る。いや老人まで生きられれば幸せである。
翌日携帯が鳴るので薄い夏布団の中から夢ごこちで取る。
「三村さん死んだ」の千華ママの一言であった。
どうにもできないし自分は駆けつけるような関係でない、しかし全く無縁ではないとも考える。さらに夕方まで寝ようと思っていたのに書き留め配達に起こされる。なんと昨夜死んだ老人からの手紙である。気持ち悪い。
「海村八郎君　千華ママの店にどうして毎夜通ったかと言えば　私には韓国の女性との間に千華ママと近い年の実子がいる。これは息子夫婦も千華ママも知らない、いや言わないのがみんなの平穏の為。そしてその子の行方は今はわからない。名は〇〇〇という。ついその心情が千華ママに移った。私の罪償いのつもりだ、千華ママの夢に協力して欲しい。お願いする」という内容であった。
ママや息子夫婦に内緒という老人の意思は護らなければいけない。
「今夜のお通夜いくから迎え来い」
「ああ、僕も行くつもりやから」
「終戦記念日にお盆やしなぁ、三村さんの因果かなぁ」と思いながら生ぬるい風に吹かれて焼香すると前のローソクの火が一瞬大きく燃えたので気持ち悪くなって引き上げる。その後何日かはあい変らずの毎日を送る。ユリさんとは時々二人で飲む仲良しになっていた。
ある夜、発信者未登録の電話が鳴る。
「海村先輩ですか？私三村ですが」
「ああ、このたびはお気の毒でしたね」
「おりいってお伝えしたいことがありますのでお時間とっていただけませんか？　ご足労ですが鈴蘭台のオヤジの自宅までお願いします」
以前よく送ったことのある老人の自宅を訪ねる。線香の香りが漂う仏間へ通される。
「父がお世話になりました、早速ですが実は父が死ぬ一月前に公正証書で遺言を作成していたことが判明しました、その内容に千華ママが関係あるのです。父の意志ですのでお伝えします、この鈴蘭台の家を千華ママに相続させるという内容です。建物を存続させるか売却するかは自由にして目的に役立ててくれと言う事です、その使い道の後見人として私と海村さんとで仲良くするようと記されています、本人には後ほど伝えます」

「なんでやろ、そやし三村君あなたも他人に相続させるのは不本意では？」
「いえ、私どもは大阪に自宅や小さな社屋もあり十分です。それも初代社長である父の御蔭です。父は数年に渡りママの御蔭で心の満足感を得た晩年を送ったそうです、それより気にかかることがあります」
「なんでしょうか」
「父がママに感謝しているのは、誰かへの代償のような気がしてならないのです。遺品のアルバムから特定の韓国の女性の写真ばかり出て来ました」と見せられる。
「まぁいろいろあったかも、昔はお父さん元気やったからねぇ」
見せられた中から数枚の写真を預かることにする。
「私はパンツの商売のことしかわかりませんので息子でない海村さんに後見人を頼むところに意味がありそうです、父の意志を尊重してよろしくお願いします」
よろしくといわれたところで本当のことは言えないしお荷物に思えた。
頭を切り替えて仕事に戻る。
なんか心も体も疲れ非日常にあこがれているころユリから電話があった。
「いま空車ですか？　もしもし元気に走っている？　何処ですか」
心が落ち込んでいる時の優しい声はうれしかった。
「ああ、空車や、元町あたり」
「お茶飲みにいらっしゃいよ、待っているわよ」
有馬道の少し横のコインパーキングに駐車する。すでにもう何度か来た部屋である。すでに冷たいジュースが用意されていた。
「さっぱりヒマや、それよりこの写真韓国のどこかわかるか？」
白黒が黄色くなった写真には女性と三村のオヤジさんが写っている。
「アジア好きが知らないの？　済州島の東よ　ほら遠く後ろに韓国最高峰のハルラ山が写っているでしょ」
そうか、済州島か。
「ユリさんの故郷なら、この場所わかるか？」
「位置くらいはわかるし、この近くに行けば田舎だからこの写真の人知っている人いるかも？」
「知りたいなぁ」
「あなたまだ気がついてないの、知らなくていいこともあるのよ　三村老人のいる時だけママはタバコ吸わなかったでしょ」
この言葉に海村は自分のおろかさを悟った。
儒教の精神が強い韓国ではいまだに親の前では喫煙しない、つまりママと三村老人は親子だったのかもしれない。ただし三村老人は知らなくママだけ知っていたことになる。黙っているママの心を思うと不憫に思え悲しみが襲ってきた。

四、それぞれの旅立ち

毎日同じような生活をしているのは海村だけで周囲には変化が起きていた。

千華ママからホームパーテイーの招待電話がきた。

日曜の夜、千華ママのマンションを初めて訪れる。兵庫区上沢通りに住んでいることさえも知らなかった。最上階の豪華な部屋に驚く。調度品も素晴らしく社長の家のような感じだ。そういえば千華ママが独身なのかどうかも知らない。

元山、ユリ、故三村老人の息子、店の彩、若菜、鬼ヤンマ、海村らが招待された。お給仕を知人のホステスに頼みママも誰も動かなくていいようになっている。

「パーティーの前に挨拶するね。私、来月、韓国に帰ります。夢であるリゾート施設にとりかかります。それで一緒に行く人も行かない人も、ここにいる人はみんな仲間だし今までありがとう。今夜はお別れ会です。でもそんなに遠くないからいつでも会えるしね」

ママの部屋を見て、そして今日になって普通のスナックのママと思っていたことが間違いであることに気がついた。書斎には二台のパソコンや数多くの本が並べられ韓国財閥の会長との写真が飾られている。

「ママってどんな人？」

と今更だがユリにそっと聞いてみた。

「ある目的で日本にきたの、それは実父が日本にいるので探す為だったみたい、施設はみんなの援助がなくても出来る力あるよ、実は韓国でもお金持ちの部類なの、でも和とか絆を心の支えにする人だから」

数時間経ち普通なら酔って無礼講のようになるところだが誰もが正気でそれぞれの役割や希望を語りまるで会議のようであった。

「わしなぁ千華ママに残りの命あずけるねん」と鬼ヤンマ。

「店の後はお任せ下さい」と彩ちゃん。

「私も病弱の旦那つれて行けるものなら今すぐ行きたい」と若菜がいう。

パーティーの帰り鬼ヤンマは海村に頼みごとをした。

鬼ヤンマはバックから二百枚ほどの写真を取り出した。

「これなぁ、地震の現場から掘り出した写真やけど、パソコンでロムに保存して欲しいのや、時間かかるけど頼むわ」

海村は快く引き受けた。それは鬼ヤンマの思い出の写真で、家族、仕事仲間、旅行先などが写っている。

「あのなぁ、お礼というたらヘンやけどこの手帳にソープとスナックの電話番号と名前書いてあるからここからもし電話があったらお前さえよければ乗せたらええ、いい客ばかりや、店や女の子には海村君の説明はしてあるから」

「ありがとう平井さん」

数日後、海村は出来る限りの最高の画質でスキャナしたロムを渡した。

「海村君ありがとう、わしの荷物はこのロムだけや、過去を捨てたいのやけど未練やなぁ、

これらの思い出はすてられへん」
冬のある日、鬼ヤンマの平井は東灘の地震の倒壊家屋跡地で線香をあげていた。
「加奈子、雄一、洋子、お父ちゃんなぁ韓国へ行くわ、もう神戸に居るのがつらいんや、墓も建ててやらんかったし法事もしてないけどほんまに気力がないんや許してや、そのうちわしもあの世に行くからな」
順調にいっていた人生なのに大自然の地震の力に変わった運命に涙しながらあの世の家族にお参りする。出発の前夜仮眠室のベットを清掃し長年乗った車も丁寧に洗車する。翌日早朝だが出社していた社長に
「お世話になりました、今から行きます」
とお別れの挨拶をする。
「そうらしいな、元気でな、あかんかったら戻ってこいよ、トンボでだいぶ儲けたやろけどわしからの餞別や」
と封筒を社長はさしだす。
「こんなにまでしていただいて、反省しています」
「いや平井さんへの顧客からの感謝の御礼はたくさん来ている。それに風呂場や車庫の掃除いつもご苦労さんやったな。鬼ヤンマの安の名前はこの会社にのこるで、ハッハッハッ」
おしゃれな服装で行き交う旅人が華やかに見える、そんな空港に固い意志をもったママたちは集合した。そして韓国に帰る人、日本を忘れたい人を乗せて済州行きが関空を飛び立った。
海村は見送った後、平常生活の毎日にもどるが心に穴があいたようである。季節は師走、この一年間は何だったんだろうと考えてみる、持って生まれた、さだめや個人の性格を悔やむよりそれらに負けずに生きる素晴らしさを千華ママたちに教えられた心の幸せに、海村は生きる勇気が出てきた。三村老人のいる時だけタバコを吸わなかったママや夜明け前に道路の清掃をしていた鬼ヤンマに人間の深さを感じた海村は今夜も潮の香りのする港町神戸で人間模様に出会う夜の巡礼をしていた。

おわり